

昔むかし、あるところに、王さまがいました。王さまには美しいおひめさまがありました。おひめさまが年ごろになったので、王さまはおひめさまの夫おっとになる人を決めようと思いました。そこで、こんなおふれを出しました。

「ほんとうのことはひとかけらも入っていない、まっかなうそをつくことができた者をひめの夫にむかえる」

おふれを聞いて、国じゆうから、男の人たちがやって来ました。

いよいよ、うそつきくらべの日になりました。審判しんぱんは大臣だいじんたちです。大臣たちはおひめさまをとて愛あいして、だれにもやりたくないと思っていました。それで、ほんのちよつとしたことにでもいちやもんをつけてやろうと待ちかまえていました。

まずは、白髪しろがのじいさんが大臣たちの前に出ました。じいさんは話しはじめました。「昔むかし、一頭の雄牛おうしがいました。この雄牛は計りきれないほど大きくて、立ちあがると天までとどきました。雄牛が雲にさわると、雲が切りさかれて、雲の血が雨のようになつてまいりました」

大臣たちは、じいさんをさえぎっていいました。

「こら、それはうそ話ではない。ほんとうのことだ。その雄牛が死んだとき、神さまが雄牛の皮で小太鼓こだいこをつくられたのだ。神さまが小太鼓をたたくと、空でかみなりが鳴りひびき、雨がふりだすのだ。これはほんとうの話だ」

じいさんは、あきらめて引きさがりました。そのあと、たくさんの男たちがつぎつぎと話をしましたが、大臣たちはみんないちやもんをつけてしまいました。さいごに、ひとりの若者わかものがのこりました。若者は話しはじめました。

「ぼくは森の狩人かりうどです。ある日のこと、森の中へ入っていくと、ぞうのむれに会いました。それはたいへんな数のぞうで、もし数えたとしたら三十万頭はいたと思います。ぼくはうれしくて、このぞうのむれをいっぺんにつかまえようと思いました。そこで、ゴムの木からしずくを二、三てき取って、火でべつとりとにて、ゴムのりを作りました。それから細い木のえだを集めてきてゴムのりにひたしてから、そのえだを森のあちこちに立てました。そうしたら、三十万頭のぞうが一頭ずつ、えだにくっついて動けなくな

ったのです。ぼくは髪かみの毛を二、三本ぬいて、それでぞうたちをつぎつぎにしばってしまいました。そして長い長い行列にして、この町につれてきたのです」

若者がひといきつくと、大臣たちはいちゃもんをつけようと口を開きました。すかざず若者はいいました。

「町に着くと、ぼくは、そのぞうたちを一頭のこらず、ここにおられる大臣たちに売ってしまいました。一頭につき、三十万銀貨ぎんかでした。みなさんは、ぼくのところに来て、ぞうをお分けになりましたね。それでぞうはみんななくなったのです」

若者は、そこまで話すと口をつぐみました。王さまが、大臣たちにいいました。

「どうだ、これはどうもうそ話のようだな」

大臣たちは、おひめさまをわたしたくなくだったので、いそいでいいました。

「これはほんとうのことです。私どもは、この若者のぞうのむれを分けました」
そこで若者は、勝ったと思いました。そして王さまの足もとにひれふしていいました。

「王さま、どうか証人しょうにんになってください。大臣がたはいま、わたしからぞうを買ったことをおみとめになりました。じつは、わたしがここにまいましたのは、ぞうのお代をいただくためなのです。大臣がたには合わせて九千億おくの銀貨を支払しはらってもらわなくてはなりません。もしきようじゅうに支払つてくださらなかつたら、みなを処刑しよけいしていただきます」

大臣たちは、ふるえあがっていいました。

「王さま、あれははじめから終わりまで、ぜんぶうそでございます。わたしたちはぞうのむれなんて、見もしませんでした」

王さまはいいました。

「なるほど。おまえたちはこの話はまっかなうそだというのだな。それならこの男の勝ちだ。むすめはこの男とけっこんさせよう」

おひめさまは若者とけっこんし、大臣たちはたいへんくやしがつたということです。

* 狩人 鳥やけものをとってくらしている人。獵師りようし

出典 『語りの森昔話集1 おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界の民話10』小澤俊夫訳／ぎょうせい